

SHOW HEY シネマールーム

★★★★

ローマ法王になる日まで

2015年・イタリア映画

配給/シンカ・ミモザ=フィルムズ・113分

2017 (平成29) 年7月15日鑑賞

シネ・リーブル梅田

Data

監督: ダニエル・ルケッティ

出演: ロドリゴ・デ・ラ・セルナ/
セルヒオ・エルナンデス/ム
リエル・サンタ・アナ/ホ
セ・アンヘル・エヒド/アレ
ックス・ブレンデミュール/
メルセデス/モラーン

👁️👁️ みどころ

日本の天皇制もすごい、ローマ法王の制度もすごい。現在のホルヘ・ベルゴリオ法王は266代でアルゼンチン出身だが、なぜ彼が選ばれたの？

「振り返れば、いつも彼らと共にいた。」そう聞くといかにも聞こえはよいが、軍事独裁政権の圧制が続くアルゼンチンで、教会はいかなる役割を果たすべきなの？

イエス・キリストの生涯と対比すれば物足りない面があるのは仕方ないが、それを差し引いてもいろいろと不満が・・・。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□ローマ法王はどうやって選出するの？■□

日本では先日、「皇室典範特例法」が成立したことによって天皇陛下の「生前退位」の道が開かれ、「平成」の年号も後少しとなった。日本の天皇制もすごい、それ以上にすごい(?)のがローマ法王の制度で、2013年3月に就任した現在のローマ法王、ホルヘ・マリオ・ベルゴリオは第266代。枢機卿がバチカンに集まり、次の法王を選ぶシステムが「コンクラベ」と呼ばれるものだ。

つい先日、『ローマ法王の休日』(11年)が公開されたが、残念ながら私はそれを見逃している。同作は主人公がとことんローマ法王になることを拒否(辞退)するという面白い物語だったが、本作はそれとは真逆で、アルゼンチン出身のホルヘ・マリオ・ベルゴリオがタイトル通り「ローマ法王に選ばれるまで」の道筋を描いたもの。アメリカ大陸出身の法王誕生は史上初だそうだが、そんな彼が第266代ローマ法王に選ばれたのは一体なぜ？アルゼンチンってどんな国？そして、ホルヘ・マリオ・ベルゴリオって一体どんな人？

■□■軍事政権下のアルゼンチンで教会はいかなる役割を？■□■

本作のホームページには、「振り返れば、いつも彼らと共にいた。現ローマ法王の知られざる激動の半生を描く感動のヒューマンドラマ。」といういかにもキレイな言葉が躍っている。また、スクリーン上でも、1960年にブエノスアイレスの大学で化学を学んでいたベルゴリオ（ロドリゴ・デ・ラ・セルナ）が神に仕えることが自分の道と確信し、イエズス会に入会し、35歳の若さでアルゼンチン管区長に任命される姿が描かれる。そして、ビデラ軍事独裁政権の中での彼の布教の苦労が描かれていく。

このように、若き日のベルゴリオがアルゼンチン管区長としてビデラ軍事独裁政権と対峙しながらいかに神の教えを守ったかが本作のメインテーマだが、私には納得できない点がいっぱい。そりゃ、教会には教会の組織と方針があることはわかるが、中間管理職としてアルゼンチン管区で働くについて、ベルゴリオはどういう立場だったの？「常に貧しい人々と共にある」というのはイエスキリストの教えであり実践だったが、それをビデラ軍事政権の下で実践している仲間たちをベルゴリオはどう見たの？そして、対処したの？

■□■布教活動に対する軍事独裁政権の迫害は？■□■

遠藤周作の原作『沈黙』をマーティン・スコセッシ監督が映画化した『沈黙—サイレンス—』（16年）はすごい映画だった（『シネマルーム39』163頁参照）が、そこでは何よりも信仰を貫くための犠牲の大きさが際立っていた。それは本作でも同様で、反政府的な聖書の説き方を実践している神父たちは大きな被害を受けることに・・・。

さらにひどいのは、ベルゴリオの恩師エステルやその娘たちへの軍事政権の対応。アルゼンチンでは当時「失踪者」が続出していたが、それを探し出す運動を始めたエステルたちにはどんな迫害が・・・？エステルたちの活動を知ったベルゴリオは、大統領のためのミサを行い、行方不明者たちの無事を祈ったが、さて、そんな行動にどこまで意味があるの？スクリーン上に登場してくる軍事政権の現実政策を見ていると、そんな疑問が次々と・・・。その結果、ベルゴリオだけは直接何の被害も受けなかったものの、周りの人たちは概ね潰されてしまうことに・・・。

■□■ドイツでの転機は？補佐司教として何を？■□■

日本では企業でも役所でも出世のためには数年ごとの「転勤」が不可欠だが、世界中に広がるカトリック教会でもそれは同じ。ちなみに、『沈黙—サイレンス—』の主人公となったセバスチャン・ロドリゴ神父とフランシス・ガルペ神父も、布教のため自ら志願して日本に派遣されてきた神父だ。したがって、もしそこで華々しい功績をあげれば、今作のベルゴリオと同じように、ひょっとして将来ローマ法王に出世する道が開かれたかも・・・？

35歳の若さでアルゼンチンの管区長に就任し、長年その立場で活動を続けてきたベル

ゴリオが1985年にドイツで神学を学ぶように命じられて移住した理由は分からないが、それがベルゴリオにとって大きな転機になったことは間違いない。アウグスブルグの教会で、スペイン語で聖母マリアへの祈りを捧げている女性と出会い、その女性との間で交わした『結び目をほどくマリア』についての会話は興味深い。さらに、本作後半では、アルゼンチンに戻り田舎の一神父として穏やかな日々を送っていたベルゴリオはブエノスアイレスの補佐司教の地位につくことになる。そして、ベルゴリオが土地開発を強行しようとする市や機動隊と対決するシーケンスが登場するので、都市開発をライフワークとしている弁護士の方はその展開に注目したが、その結末はアレレ・・・。

青空の下で枢機卿にミサを行ってもらうことによって一体ナニが解決するの？現実派の弁護士である私はそう思わざるをえないし、そんなキレイ事ですましてしまうローマ教会のやり方にも不満タラタラだが・・・。

■□■コンクラーベ制度とは？その役割は？■□■

ドナルド・トランプ候補とヒラリー・クリントン候補が激突した昨年12月のアメリカ大統領選挙では、その結末と共にアメリカの大統領選の選挙制度にも注目が集まった。今年5月7日のフランスの大統領選挙、5月9日の韓国の大統領選挙、5月20日のイランの大統領選挙でも選挙制度の違いが注目された。議院内閣制の日本では総理大臣を国民の直接選挙で選ぶことはできないが、大統領制の国では、大統領は国民の投票で選ばれるシステムになっているものの、しかし、その制度は各国各様だ。しかして、ローマ法王を選ぶコンクラーベの制度とは？

中国では、今年秋に開かれる中国共産党大会で5年に度の習近平党総書記（国家主席）の再任と、7名の政治局常務委員をはじめとする幹部の選任が行われるが、その賛成率は概ね100%だ。民主主義の国では100%の賛成になるとその選挙はほとんど無意味で、対立候補の存在自体に意味があるとされている。しかして、ローマ法王を選出するコンクラーベの制度では？

本作でそのシステムが説明されず、またその内部で暗躍しているはずの権力闘争のサマがまったく描かれないのが残念だが、それは本作製作の狙いからすればやむを得ないものかも・・・。しかして、本作はホルヘ・マリオ・ベルゴリオが第266代ローマ法王に選出された過程を描く1つの歴史的ストーリーとしてそれなりに楽しめ学習できるものだが、イマイチ物足りない面も・・・。

2017（平成29）年7月21日記